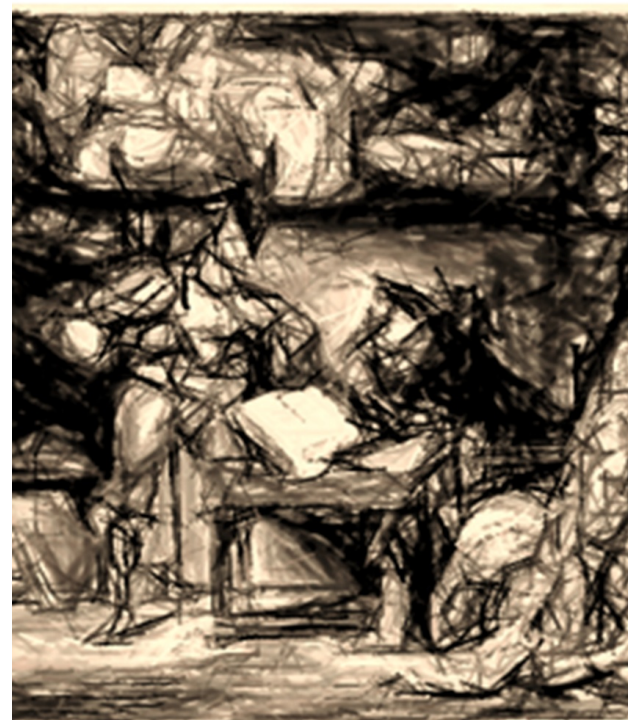


FAUST・1



正道 SEIDOU

戯曲「ファウスト第一部」

目次

戯曲「ファウスト第一部」	
はじめに	3
第一幕 ファウストとメフィスト	
天上の序曲	5
工房	6
魔女の住処	10
第二幕 ファウストの恋	
街路	15
ふたたび街路	18
森林と洞窟	20
第三幕 二つの殺人	
井戸のほとり	23
マルテの家の庭	24
通夜	27
第四幕 グレートヒェン悲劇	
教会の片隅	31
ワルプルギスの夜（1）	31
池のほとり	33
第五幕 悲劇の終わり	

ワルプルギスの夜（2）	36
マルテの家	37
牢獄	38
あとがきと付録	
おわりに（第二部の展望）	44
付録 高市総理誕生	45

戯曲「ファウスト第一部」

はじめに

いちど長めの前書きを書いたのですが、それを破棄し、とくに何も言わずに本書を配信することになりました。

この作品は、ゲーテの『ファウスト』の簡略版です。底本には、相良守峯訳（岩波文庫）を使用していますが、実のところ、あまり忠実に従ってはいません。ともあれ楽しんでいただければ幸いです。

第一幕

ファウストとメフィスト

天上の序曲

天の王宮に天使たちが集まり、栄光の王座にまします神を賛美している。ところが、その場へ、急に不穏な影が差した。皆で見ると、悪魔メフィストが近づいてきたのが、その原因だと分かった。この暗い悪魔メフィストに対して、神が親しげに言う。

神 メフィストよ、相変わらずの不満顔だな。たしかお前は地上を彷徨っていたはずだが、かの場所には、お前の氣に入るようなものは何もなかったのか。

メフィスト（嘲るように）ありませんあ。あるのは惨めったらしい人間の姿ばかりですよ。やつら愚かすぎて哀れなもんだから、私がみな、やさしく地獄に送ってやるんですあ。

神 お前は、あのファウストを知ってるか？

メフィスト あの高名な錬金術師ですね。

神 わしが見込んだ誠実の士だ。今のところは迷いの中にあるが、いつか澄明な心境へと導いてやろうと思っておる。だからお前は、やつが次第に悟りを高めていく姿でも、そばで見守っているといい。いかな悪魔であっても、その成長物語には感銘を受けることだろう。

メフィスト 見るのはいいですけど、ただずっと見守っているなんてのは詰まらない。あなたが入れ込んでいる人間なんでしょう。ならばむしろ、あの男を、私たちの陣営へと引き込んでみたいもんですな。

神 というど？

メフィスト つまり、あなたと賭けをしたいんですよ。そうです、あなたはあなたで奴を導けばいい。けれども、それと同時に、私は奴のことを「地獄にいたる道」へと誘います。はたしてファウスト博士は、最終的に、どちらの方向性に身を委ねるだろうか。とまあ、そういう賭けです。

神 悪魔の誘惑というわけか。いかにもお前が好みそうな戯れだが、ファウストが生きている間は、私も別に、それを差し止めようとは思わない。人間は、努力するかぎり迷うものだからな。そう、善き人間は、たとえ暗い衝動に突き動かされても、決して正しい道を忘れないものだ。

メフィスト 御託、まことに結構な話です。あなたには、人間の暗い情動の深刻さが、まるで理解できないってことが分かりました。となれば、この賭けの勝利は、もうこっちのもんですよ。もし私の思い通りに事が成就した場合には、腹の底から勝鬨を上げさせてもらいましょう。

神 よかろう。さっそく始めるがいい。

〔メフィスト、笑いながら天の王宮から去っていく〕

工房

教会のような建物。しかし実際には錬金術師の工房である。その中でファウストが落ち着かない様子で歩いている。

ファウスト（独白）ああ、虚しい。虚しくてたまらない。人々から賢者と呼ばれるほどにも学究を重ねたが、実際の私は、世界について何ひとつ理解していないのだ。この世を統べる原理について知りたかったのに、今なお、欠片ほどもそれが分からない。

しかも、学究生活に人生を全振りしてきたために、人並みの経験や快樂とも無縁に過ごしてきたしまった。そんな私の人生は、古い本に挟まって暮らす、シラミのそのようだ。そこには輝きがない。潤いがない。すでに初老の私だが、このままでは本格的に、薄暗く干からびた老境を迎えることになるだろう。そうなるのが何としても怖いのだ。

〔嘆くファウストの横をすり抜けるようにして、黒い犬（プードル）が舞台（室内）に登場する〕

ファウスト なんだ犬畜生め、勝手に人の部屋に入ってくるな。

〔ファウストが犬を叩こうとすると、犬がその拳をすり抜けながら、人の姿へと変身してゆく。いまや犬は、人型をした悪魔の姿に変わっている〕

ファウスト なんと！

メフィスト まずはお前様をうしあげます。こんばんは、ファウスト先生。

ファウスト お前は何者だ。

メフィスト 常に悪を欲して、しかも常に善をなす、あの力の一部です。

ファウスト いくら返答を求めたといっても、そんな謎かけが聞きたい訳じゃない。まともな言葉を話せ。こちらはもう、お前が人外の化け物であることは分かっているんだ。だから、自分がどんな化け物かであることを示すがいい。

メフィスト となると、そうですね、私は常に否定をする霊なんです。

ファウスト 常に否定するだって？ それは、すべてを否定するということかね？

メフィスト まあ、大体そんなところです。だって、生まれてきたものは、押しなべて最後には滅びなくちゃならないでしょう。だったら遠回りせず、最初から生まれないほうがいい、というのが私の立場なんです。

ファウスト つまり虚無主義ということだな。

メフィスト ええ、そうです、虚無が一番です。それだから「もうすでに生まれてきてるものは、それを早々に消し込んでしまうのが次善の策」ということになります。ここらあたりが私の現実的なモットーですな。

ファウスト なるほど、お前の目標と任務は分かった。

メフィスト ご理解いただけて幸いです。

ファウスト とはいえだ。お前は、大規模な破壊工作は難しいので、小規模な破壊工作をやり出したんだな。こうして私なんぞの前に現れたということは。

メフィスト それもお分かりですか。まあそういうことです。どのみち滅ぶわりに、既存の存在というもののは、なかなか頑丈なものでして。そのため、ほんの少しずつしか、私の仕事ってのは進んでいかないんですよ。

ファウスト そいつはご苦労だな。

メフィスト ただですね、とくに頑丈そうな「あなた」みたいな存在をなし崩しにできれば、それを見た大勢の人間も壊れやすくなるんです。私がここに現れたのは、効率重視の観点から導かれた行動なんですよ。

ファウスト 私の存在が頑丈とはどういう意味かね？

メフィスト あなたは意外と神さまに愛されているんです。それで、たくさんの「存在の光」をその身に注いでもらってる。頑丈とはそういう意味です。

ファウスト たわごとだな、私が神に愛されるような人間でないことは、自分で重々承知している。

メフィスト（ニヤニヤしながら）ふーん、そうですねえ。

ファウスト それはそうとして、お前は私を、お前の主義主張のワクに取り込もうとしているんだな。ここは間違いないんだな。では、それに従ったとき、お前は私に、どういったメリットを与えてくれるのだね？

メフィスト あなたはさっき、経験と快楽を求めてらっしゃったでしょう。さしあたって私は快楽と相性があるので、そいつをあなたに沢山プレゼントいたしますよ。

ファウスト たくさんの快楽か。確かに快楽は求めたが、大盛り薄味の快楽では決して満足せんぞ。私はこれでも学究の徒でもある。したがって私は、快楽というのであれば、もはや快楽と真理が重ね合わせになるほどの、そうした「至高の快楽」が欲しいのだ。

メフィスト そこは大丈夫です。私は全知とまでは行きませんが、いろいろなことを知っている古参の霊ですからね。しかも大きな霊力を併せ持っている。

ファウスト なるほど、その知恵と力によって、私に至高の快楽を味わわせてくれるというわけか。正直まだ信用しきれないが、まあ、そういうことだとしておこう。で、その対価として、私からはお前に何をくれてやればいい？

メフィスト そんなことは、おいおい決めていけばいいですよ。

ファウスト そういう訳にはいかない。悪魔は利己主義者だから、はっきりと契約条件を教えてもらわないと、最後はこっちが泣きを見ることになる。

メフィスト ではご希望どおり、契約内容を明確にしておきましょう。私は、この世ではあなたにお仕える義務を負います。あなたの指図に従って、休む間もなく働きましょう。

ファウスト ほうほう。

メフィスト でも、その代わりに、あなたがあの世に行ったときには、あなたを虚無の小箱に封入して、その箱に「ファウスト・この無価値なもの」とラベルを貼らせていただきたい。そしてそれを、神さまや天使にご照覧いただくんです。それで私の虚無主義が公に肯定されたことになる。

ファウスト フフ、くだらない与太話だ。あの世のことなんか、私には本当にどうだっていいのだから。私はとにかく、この現世で、この手に、現実に、満足をつかみたいのだ。

メフィスト 願ってもない返答だ。まことに潔い。ではさっそく本契約を結ぶとしましょう。

ファウスト いや、私から言わせてもらおう。その契約はこうだ。もし私がある場面に満足して「この瞬間よ留まれ、お前はいかにも美しい」と言ったら、お前は私を縛り上げてもいい。私は喜んで滅び、お前のものとなろう。

メフィスト わかりました。では参考までに、どういう類の満足が欲しいのか、もう少しばかり具体的に教えてください。

ファウスト そうだな、言ってみれば、この私の自我によって、世界の最高最深のものを掴みたいのだ。そして、その自我を人類の自我にまで拡大したい。そうして結局は、人類とともに私も破滅しようと思うのだ。

メフィスト まことに気宇壮大ですね。ぜんぜん具体的ではありませんが、とにかくスケールが大きなことを所望されていることは分かります。いやいいことです。それでこそ、大悪魔である私がかかわる甲斐がある。

「ファウストとメフィスト、二人並んで工房から出ていく」

魔女の住処

古びた建物のまえに立つファウストとメフィスト。

ファウスト いかにも怪しげな屋敷だな。ボロボロで汚いうえに大層くさいと来ている。

メフィスト くさい？ ああ、なにしろ魔女が住んでいる家ですからね。ここでは薬草だの動物の死骸だのを煮込んで、あつしら御用達の秘薬を作ってるんです。私は気になりませんが、そりゃ変てこりんな臭いだってするでしょう。

ファウスト とくればお前は、私に何か怪しい薬でも飲まそうとしているのか。

メフィスト お察しのとおりです。あなたには最上の回春剤を飲んでいただくと思っています。回春どころか、年齢自体が三十も若返ってしまう、そういう飛びきりの秘薬です。

ファウスト なぜに私が、三十も若返らなければならない？

メフィスト 恋をしてもらうためです。

ファウスト 恋、恋だって？ 何を言っているんだ？

メフィスト いや真面目な話です。この私はね、長年をかけて集めた「地上データ」というものを持ってるんです。

ファウスト 地上データ？

メフィスト ええ。そして、そのデータの統計的結論としては、どうやら「本気で恋をすること」以上に強烈な快楽というのは、この地上に存在しないんですよ。なにしろそのとき、魂そのものが激しく、無上の悦びに揺さぶられるんですからね。

ファウスト はあ、これは悪魔の言葉とも思えんな。

メフィスト 悪魔でも天使でも同じです。データを真摯に解析すれば、とどのつまり、そんな風に言う

しかないんですよ。

ファウスト そういふものなのか。

メフィスト しかも、恋する当の人間にとっては、愛しい相手こそが、まぎれもない真実であつたり真理であつたりするんです。それって、あなたが望んでいる至高の快樂そのものじゃないですか。

ファウスト 残念ながら、よく分からない。なにぶん私は、これまで色事とは無縁で生きてきてしまつたからな。

メフィスト だからこそです。だからこそ実地で、あなたには恋を経験してもらわなくちゃならない。そこにお望みのものがあるんですから。とはいえ本気の恋をするには、残念ながら年齢制限というものがあるんです。

ファウスト そんな話は初めてきいたぞ。

メフィスト 真実の意味における「本気の恋」ってのは初恋のことです。そして、初恋を経験するには、二十歳そこそこの若さはどうしても必要なんです。若い血潮がじゃんじゃん体中を駆け巡らないと、せっかくの恋の情熱が、すぐに冷めてしまいますからね。

ファウスト ふーむ。

メフィスト 本当はもっと若いほうがいいんですが、そこまで極端な若返りの成功例は、われわれの長大な薬学史のなかにも、記述が見出せません。

ファウスト いや、二十歳そこそこで十分だ。それに私としても関心がない話ではない。若返り、やつてやろうじゃないか。

「ファウスト、メフィストとともに魔女の家に入っていく」

魔女の厨（くりや）

建物の入口をくぐると、いきなり厨房のような部屋になっている。そこにでっぷりと太った魔女がいて、鍋の中身をかき混ぜている。

魔女（ファウストとメフィストを見て）誰が忍び込んできたんじゃない。不法侵入は許さん。骨の髄にこたえるほどの熱攻めに遭わせてやるぞ。

〔目の前にある鍋の中身をお玉ですくい、それを二人に投げつける〕

メフィスト（よけつつ、あたり一面の食器やら器具やらを、手で振り払い）くそ婆め、なにもかもを割ってやるぞ。

魔女 ひゃあ！

メフィスト 俺が分からののか。自分のご主人さまを見誤るとはどういう了見だ。今さら名を名乗れとでもいうのか。

魔女（慌てて）あらまあ旦那、これはとんだご無礼を致しました。あまりに人間そっくりに化けてらっしゃるので、パツとは分からなかったんです。サタンの旦那がお見えとは、あたしは気もそぞろです。

メフィスト ババアめ、その名前を言うのは禁物だ。

魔女 それはそうと、今日はこういったご用件で？

メフィスト ああ、例の若返り薬だ。あれをたっぷり、この御仁に吞ませてやってほしいのだ。お前んところの最上のやつを飲ませてやってほしい。

魔女 もちろん構いませんが、口上を述べ切るまでに一時間はかかりますよ。

メフィスト そんな失敗よけの口上はなくても大丈夫だ。この先生は、ずいぶん修行を積んでらっしゃるから、薬の副作用なんか屁でもない。すぐになみなみと注いでくれ。

〔魔女、もったいぶった仕草で、杯に薬をそそぐ。ファウストがそれを口にもっていくと、軽く炎が燃え立つ〕

メフィスト さあ、威勢よくグイとお飲みなさい。

ファウスト（ゴクリと生唾を吞み込んでから薬を仰ぐ。するとすぐに）うーん、頭がグラグラする。

メフィスト そのまま昏睡するはずですから、私がベッドにお運びいたしましょう。起きたときには、も

う二十歳の青年になっているはずです。

ファウスト うーん、うーん。（眠りに落ちる）

第二幕
ファウストの恋

街路

郊外のベンチに、ファウストとメフィストが座っている。ファウストの姿は二十歳の青年のそれである。

メフィスト 星回りが教えるところでは、この日この辺りで、あなたに運命の出会いがあるはずなんです。ですから私が「それッ」と言ったら、そこに現れた女性に声をかけてもらいなさい。きっと上手に交際を始められますよ。

ファウスト オイオイ、本当だろうな。

〔そこに大荷物を持ったグレートヒェンが通りかかる〕

メフィスト 今です、それ先生、行きなさい！

ファウスト（グレートヒェンに）きれいなお嬢さん、僭越ながら、そのお荷物持って差し上げましょうか。

グレートヒェン 私、きれいでもないし、お嬢さんでもありません。持って頂かなくとも、ちゃんと家まで運べます。（そのまま退場）

ファウスト（メフィストに）オイコラ、取り付く島もないまま、実にアッサリと振られたんだが。

メフィスト いや、これが正常な始まりです。ちゃんと楔は打込まれたはずで、その疵口から、あなたの存在が、これからゆっくりと、あの子に染み込んでいくんです。初めての恋ってのは、そういう風に始まるものですよ。

ファウスト まあ確かに、今の軽口にためらいなく乗ってくるような相手では、これからの過程のすべてが、すべて浮薄に進んでいってしまいうちはあるがな。そうして最後には、いかにも軽々しいお別れがやってくる、と。私もそういうのは望んじやいない。

メフィスト つまり私の人選は間違っただけじゃなかったということですか。

ファウスト いや実際あの娘はかわいかった。十四、五だろうか。きっと嫉もよく、慎ましかなのだろう。つんとしたところも私には好ましい。ぜひともあの娘を手に入れたものだ。

メフィスト 実はあの娘は、さっき教会から出てきたんです。懺悔に行ったあげく、けっきょく「何も罪はない」と言い渡されてね。ついでに知り合いから野菜も渡されたみたいです。

ファウスト 要するに無垢な魂を持っているのだな。おお、それは何とも言えぬ魅力だ。私は心から願う。あの娘を、俺の初めての恋愛の相手としたい。正直に言えば、今すぐまた会いたいとすら思う。

メフィスト そんな突進するようなやりかたはいけません。焦れば何もかもボシヤりますよ。

ファウスト ならば、せめて彼女の持ち物を何か手に入れてくれ。彼女の胸に触れたスカーフでも、彼女の手に触れたハンカチでも。

メフィスト ははあ、思春期特有のフェティシズムですな。

ファウスト いや、そうだ！ いっそ気づかれないよう、私を彼女の部屋に連れて行ってくれまいか。そこで目いっぱい彼女の匂いを嗅いでみたいのだ。

メフィスト 内心の表明が率直なもの、そこまで来ると若干ひいてしまいますな。ハハハ。ですが、私のやる気をお見せするため、今日のうちにも、それを実現してさしあげましょう。

ファウスト そうか。じゃあ、もう出かけていいかな。

メフィスト さすがに、まだ早すぎますよ。

夕べ、グレートヒェンの家にて

小じんまりとした清楚な部屋。そこでグレートヒェンが髪を梳かしつつ、三つ編みを結っている。

グレートヒェン（物思いにふけりながら）昼間に声をかけてきたあの人は誰だろう。教えてくれる人があったら、その方に何か贈り物をしてもいいわ。知りたい。本当に立派な方のようにだった。家柄もいいに違いない。そうでなければ、人はあんな大胆には出来ないもの。

「そう言い残してグレートヒェンは退場。階段を下りていく。入れ違いにファウストとメフィストが、グレートヒェンの部屋に入ってくる」

メフィスト（ファウストに）そおつとです。ここでは音を立てないようになさい。

ファウスト（大きく部屋の空気を吸い込みながら）頼むから、俺をここに一人にしておいてくれ。

メフィスト 分かりました。（部屋を見まわしながら）ほう、こんなに部屋をキレイにしておく娘もめずらしい。（退場）

ファウスト（家具等、そこら中にそつと触れながら）ここはまるで聖なる殿堂だ。ここには満ち足りた心が息づいている。貧しさのなかに漂う、なんという高貴な豊かさだろう。出来るなら俺は、何時間でもここに留まっていたい。

「ファウスト、満足そうな顔をしていたのが、急に表情をくもらせて拳を握る」

ファウスト ところがファウストよ、お前はどんな気持ちでここに忍び込んだのだ。自分の欲望のことしか考えていないではないか。それは娘の清楚さや豊かさとは、まったく正反対の気持ちなのではないか。

「再び、ゆっくりと喜びを表情に浮かべながら」

ファウスト けれども今は、自分の心が、彼女の愛に融けてゆくのが分かる。敬虔になった自分に気づく。あの傲慢だった人間が、なんと小さくなったものか。おそらく今なら、私は消え入りそうになりながら、あの娘の足元にひれ伏すだろう。

メフィスト（慌てて登場）旦那、もうトンズラしなくてはなりません。娘が階段を上ってきます。

ファウスト ああ、躊躇わずに出て行こう。俺はもう、こんな不埒な真似はしない。

「ファウストとメフィストの退場後、グレートヒェンが部屋に入ってくる」

グレートヒェン（戸惑いつつ）なんだろう。さっきまでと違って、なんだか部屋の中が、蒸し暑くって息苦しい。（窓を開けて）早く母さんが帰ってくるといいんだけど。むしっと暑いのに背筋はゾクゾクする。悪い妖精でもいたのかしら……だなんて、私ったら、なんて馬鹿げた臆病者なんだろう。

ふたたび街路

グレートヒェンの部屋から去った三日後のファウストとメフィスト。

ファウスト どうだろう、上手くいくだろうか。

メフィスト だいぶ燃え立ってきましたね。遠からず、あの娘はあなたのものになるでしょう。

ファウスト 何か根拠があつての言葉かね？

メフィスト グレートヒェンの家のとなりに、マルテという女が住んでいます。四十過ぎの未亡人ですが、こいつを私が籠絡しておきました。ですから今夜かならず、マルテの家で、グレートヒェンに引き合わせてあげましょう。

ファウスト そのマルテという女は信用できるのかね。

メフィスト 信用ですか……さしあたってマルテが、おせっかいで軽薄なのは間違いありません。これは彼女が「男女の取り持ち役」をやるには持つてこいということです。そしてマルテは、いま私に惚れている。そうやって惚れている間は、女つてのは、男の言うことを、ちゃんと聞くものですよ。

マルテの家の中庭

グレートヒェンはファウストの隣に、マルテはメフィストの隣に並んで歩いている。

グレートヒェン 私恥ずかしいですわ。見聞が広い方は、思いやりの心から、嫌な顔を見せないことに慣れていらっしゃるでしょう。私のつまらない話が、あなたの慰みにもならないことは分かっているんです。

ファウスト 変な心配をなさらないでください。私にとっては、あなたの一眼が、あなたの一言が、この世のあらゆる知識にも勝って尊いのです（グレートヒェンの手にキスをする）。

グレートヒェン（慌てて手を引っ込めながら）無理にそんなことしないでください。きたなくてガサガサした手なんです。母にやかましく言われて、わたし家事ばかりしています。それで荒れてしまったんですわ。

ファウスト（クスッとわらって）純粹や無邪気というものは、自分の神聖な値打ちを一向に知らずにいるものだなあ。謙遜や卑下という徳も、自然が生みだす最高の賜物なのだけれど。

グレートヒェン（赤くなって）あなたが、ほんの少しの時間でも私のことを想ってくださったなら、私はそのことを、きつといつまでも忘れません。

ファウスト かわいい人。あなたには、ひとり物思いにふける時間が多いのですか？

グレートヒェン そうでもありません。炊事や掃除をしなければなりませんから。それに編み物や針仕事などで、ほとんど朝から晩まで働きとおしなんです。

ファウスト それは大変だ。

グレートヒェン ああ、でも前よりかは、割合に落ち着いた日を送っておりますわ。兄は兵隊に出ていますし、まだ小さかった妹は病気で亡くなってしまいましたし。

ファウスト 妹さんの世話をされていたんですか。

グレートヒェン ええ、あの子のことでは、ずいぶんと世話を焼きました。けれど、あんな苦勞なら、もう一度してもいいと思います。だって、とても可愛かったのですもの。母の産後の肥立ちが悪くって、私が母親がわりになって妹を育てたんですの。私の胸に抱かれたり、膝の上に乗って、機嫌よく笑っていましたわ。

ファウスト ああ、あなたは聖母のようだ。

グレートヒェン お言葉が過ぎますわ。

ファウスト ところで、さきほど私が中庭に入ってきたとき、あなたは直ぐに私のことが分かりましたか。

グレートヒェン 御覧になりませんでした？ 私が目を伏せたのを。

ファウスト つまり気づいていたということですね。では、先だて大荷物を持ったあなたに発した私の、

あの失礼な言葉を許してくださいませか。

グレートヒェン あの時はいびつくりしてしまいましたわ。男のかたから声をかけられるなんて初めてのことでしたから。でも白状しますわ。あのときすぐ、あなたを好ましく思ったのに、自分でそのことに気づきませんでしたの。

ファウスト ああ、たまらなくかわいい人だ。

マルテ（メフィストと一緒に登場。そしてメフィストに）もう日が暮れますわ。

メフィスト では、もうお暇するといたしましょう。

マルテ もっとあなたと一緒にいたいのですけれど、ここは酷くうるさいところなんです。本当に「近所の出来事を見張っている以外には、ほかに何も用事がない」とでもいうような土地なんですよ。

メフィスト それは難儀ですな。

マルテ それだから、男女が何をしていても変な噂を立てられますの。で、その如何にもこれから噂を立てられそうな二人はどこに？

メフィスト（指さしながら）あそこにいますよ。

マルテ あの方、グレートヒェンを気に入ったんですね。

メフィスト 娘さんのほうでもね。これが世の成り行きですよ。それでは皆で帰り支度といきましょいか。

森林と洞窟

雨の日、洞窟で膝を抱えているファウストに、メフィストが話しかける。

メフィスト あなたが、あの娘と初めて会ってから半年にもなりますな。あんなに幸せそうだったのが、

どうして今は虫みたいに、こんな土の穴のなかでじっとしてゐるんです？

ファウスト 犬が！ お前は分かっているだろう！

メフィスト グレートヒェンの妊娠についてですか？ もちろん分かっておりますよ。一對の男女が恋をして、体を重ねる喜びを知って、そうして行きつく先にあるのが子供です。べつに何の不思議もありはしません。

ファウスト だが俺は、そこまでは望んじやいなかったんだ！ 父親になるといふのは何かが違う。そんなものになったら、俺は真理を求めることを忘れた、哀れな働きバチになってしまう。

メフィスト 情けないですなあ。そうやって父親になることを恐れて、こんな森深くの洞窟まで、フラと迷い歩いてきたなんて。それじゃあ、あの娘から逃げますか？

ファウスト そんなことが出来るものか！ 私はグレートヒェンを愛している。あの美しい体の虜にもなっている。ただ父親となる自分を認められないだけなのだ。

メフィスト だいぶ気持ちがいじれていらっしゃいますな。では今は、惰性に促されるがままに任せなさい。そのうち、どうしても自分の進路を決断せざるを得ない日が来るでしょう。その日に何もかもを片付けるんです。

ファウスト ああ、それしかあるまい。

第三幕 二つの殺人

井戸のほとり

グレートヒェンとリースヘン、水瓶を手にして井戸の前で語らう。

リースヘン　ねえ、あなたバルバラさんのこと聞いた？

グレートヒェン　何のこと、私知らないわ。

リースヘン　飲み食いするのも、今では二人分なんだって。

グレートヒェン　それは彼女のお腹に「もう一人」がいるってこと？

リースヘン　ええ。結局なるようになったのよ。身分と顔がいいだけで身持ちが悪い男、そんな男とずっと一緒にいたんですものね。そうしてキスしたり抱きあったりした挙句、とうとう花が散ったというわけよ。

グレートヒェン　可哀そうな人。

リースヘン　私は可哀そうだななんて思わない。だって私たちが地道に家の仕事をしている間、バルバラさんは、楽しみに時間を忘れるほどの思いをしていたんだもの。いい気味よ。すっかりしよげて、教会で懺悔させられるがいいわ。罪の肌着一枚だけを着てね。

グレートヒェン　でもその男の人、きっとバルバラさんをお嫁さんにするわ。

リースヘン　馬鹿ね、そんなことする訳がないじゃない。若い男なら、他に幾らでも楽しみの相手を見つけられるもの。実際、もう逃げてしまったらしいわよ。

グレートヒェン　いくらなんでも、それはひどい話だわ。

リースヘン　いえ、そんなことはないわ。万一結婚なんてしたら、私がひどい目に遭わせてやる。バルバラさんの家の戸口に「アバズレ女」って書いてやるわよ（水瓶を持って退場）。

グレートヒェン（水瓶を持ち、家に向かいながら）以前の私だったら、誰かが異性交遊していたら、迷うことなく、その人のことをきき下ろしていた。自分は高見の見物で、偉そうな顔をしていたんだわ。なのに今は、自分自身がその罪に晒されている。だけれど……こうなるまでの道程は、まあ、なんて良かっただろう。なんて嬉しかっただろう。

道端の聖母像の前で

石壁のくぼみにマリア像が設置されている。水瓶を置くグレートヒェン。キレイな花が供えてあり、彼女もまた、道端に自生している草花を引き抜いて、それを供えた。

グレートヒェン（祈って）多くの苦しみにあった聖母さま。どうか私の悩みに対しても、お恵みぶかく、その優しい顔を向けてくださいませ。私の骨身にしみる苦しみを、あなた以外の誰が感じてくれましよう。マリアさま、私を恥と死からお救いくださいませ。

マルテの家の庭

ファウストとグレートヒェンが語り合っている。

グレートヒェン 約束してほしいんです、ハインリッヒさん（＝ハインリッヒ・ファウストのこと）。

ファウスト うん、私に出来ることなら。

グレートヒェン では神さまを信じていると仰って。あなたはとてもいい方なのだけれど、どこか宗教のことを軽視しているように見えるんです。

ファウスト そんなことはない。私は、自分が愛する人のためなら、この身命を惜しまないし、教会の邪魔をするつもりもない。

グレートヒェン 邪魔をしないだけじゃ駄目なのよ。もっとちゃんと、教会が示している神さまを信じ

なくてはならないわ。ミサや懺悔にも、私と一緒に行きましょうよ。

ファウスト 可愛い人よ、私がいう事をよく聞いてほしいんだ。そもそも人が「自分は神を信じる」だなんて、そうハッキリと言えるものだろうか。

グレートヒェン 言えないとでもいうのですか？

ファウスト 少なくとも私には言えない。というのも、一切を包摂するもの、一切を支えるものこそが、私は世界で最も尊いものだと思っている。そして、それを私は何と呼べばいいのか分からない。尊いと思う感情こそがすべてで、名前などは、ただの響きか煙のようなものだ。

グレートヒェン そういえば、それでいいようにも思えますけれど、でもやっぱり変だと思うんです。だってあなたは、キリスト教の神さまを信じてらっしゃらないんですもの。すべてを包摂するあなたの神さまは、きっと悪魔だって包摂してしまうでしょう。

ファウスト 何を言ってるの？

グレートヒェン ではハッキリと言いますわ。私あなたが、あの「お友達」と一緒にいらっしゃるのが、前から嫌だったんです。

ファウスト どうしてかね？

グレートヒェン だって、あの気味の悪い顔を見ることほど、この胸に痛みを与える出来事はありませんもの。

ファウスト そんなに怖がらなくていいのだけど。

グレートヒェン でも血が騒ぐの。いつもの私は、本当に誰にでも好意を持てるんです。けれど、どんなにハインリッヒさんに会いたいときでも、あの方を目にしますと、背すじがゾツといたします。私には、まるであの方が、悪魔のように感じられますの。

ファウスト ああいう変わり者もいなくちゃならない。

グレートヒェン いえ、私は、あんな方とは一緒にいられません。あの方が戸口から入ってこれると、いつも人を馬鹿にしたような顔に見えますの。何事にも同情心などなくて、どんな人間も愛してはやらないぞと、そう言っているみたいに見えるんです。

ファウスト こいつ、勘のいい天使だなあ。

グレートヒェン あ、ごめんなさい、私あなたが聞きたくもない話をずっとしていますわね。どうも、このごろ気がたってしまって、落ち着かないんです。それに、私もう帰らないと。

ファウスト ああ、ほんの二時間ほどでもいい。誰の目も憚らず、お前とベッドのなかで、ゆっくりと抱きあっていられたらいいのになあ。そうしたらお前だって、安心を胸にして眠れるだろうに。

グレートヒェン ええ、それは素晴らしいことですわ。でも……私が一人暮らしなら簡単ですけど、なにせ母さんと二人ぐらしですからね。もし母さんに私たちの逢瀬が見つかったら、私その場で死んでしまいますわ。

ファウスト それならいい手がある。（懐から小瓶を取り出して）ここにちょっとした瓶があつてだね、中身は高価な眠り薬なのだ。これを三滴ほど、お母さんの飲み物に垂らしてくれればいいんだ。

グレートヒェン まあ。

ファウスト そうすればお母さんは、その日の夜ばかりは、一度も起きずに、昏々と眠り続けるだろう。私はその隙に、お前の部屋に忍び込めばよい。

グレートヒェン ああ、どうしよう。今の私は、あなたのためならば何でもしてしまうわ。けれども、それは毒ではないのでしょうか。

ファウスト もちろんだ。お前に毒などを勧めたりするわけがない。

グレートヒェン 自分で自分が怖いのですけれど、あなたの顔を見ると、ほんとうに何でも仰るとおりにしたくなってしまうのです。だから、明日の夜にでもやってみますわ。

ファウスト ああ、いい娘だ。

グレートヒェン でも、これまでもずっと、あなたのために色々なことをしてしまって、もう何もすることが残っていないような気もするわ（退場）。

〔メフィストが登場する〕

メフィスト クソガキめ、もう行きましたかね。

ファウスト 立ち聞きしていたな。

メフィスト ええ、全部聞いていましたよ。どうやらあの娘は、人相見の才能があるんですね。そして私の面構えが、内に隠された意味を告げるんですな。もしかしたらグレートヒェンは、私が悪魔だってことを確信しているかもしれません。

ファウスト そうかもしれない。ところで、さっき彼女に渡した睡眠薬は、ちゃんと安全性が確約されているんだろうな。

メフィスト もちろん出来るかぎり精錬してありますが、それでも、この世に絶対ということはありません。それは仕方ありません。何にせよ、明後日の朝には結果が分かるでしょうよ。

通夜

グレートヒェンの家では、母親の通夜が行われている。睡眠薬を飲んだ母親はよく寝たのだが、そのまま起きることがなかったのである。街のうわさで事情を知り、慌てて、その通夜に駆け付けようとしているファウストとメフィスト。

ファウスト まったく何という手違いだ！　すべてお前のせいだぞ。

メフィスト 申し訳ありませんが、きっと三滴が四滴か五滴になってしまったんですよ。年寄りの母親には、すこし刺激が強すぎたんですな。

ファウスト あれは今、芯から打ちのめされているずだ。早く行って、慰めてやらなければ。

〔そこに、グレートヒェンの兄であるヴァレンティンが立ち現れる〕

ヴァレンティン 止まれ！　お前たちだな、妹が言っていた二人組というのは。話はすべて聞いたぞ。人殺しの無法者め。

ファウスト あっ、兵隊に行っているというグレートヒェンのお兄さんか。お兄さん、どうか話を聞いてください。

ヴァレンティン うるさい、誰がお兄さんだ！ これを受けてみる（ファウストに向かって剣を振り下ろす）。

メフィスト 私が受けて立とう。それ（と言って剣を薙ぎ払い、ファウストを庇うような態勢をとる）

ヴァレンティン くそう！ ならば聞け、妹はな、グレートヒェンは、俺にとって最大の自慢だったんだ。俺が仲間たちに「グレートヒェンよりも、清楚で可愛い女がいるだろうか」と聞けば、その場にいる誰もが「そんな女はいない。グレートヒェンは女全体の誇りだ」と言うほどにも賛美されていた。

ファウスト まさにそのとおりです。

ヴァレンティン 黙れ！ それをお前たちが台無しにしたんだ。妹はもう傷物で、しかも母親殺しの犯人に落ちぶれてしまっている。こんなことが許されていいのか！

ファウスト すべては私のせいです。

ヴァレンティン ならば死んで償え！（再びファウストに切りかかる）

メフィスト そういう訳にはいかないですよ（と言って、ヴァレンティンの腹に剣を突きさす）

ヴァレンティン 無念！（倒れる）

マルテ（家の窓を開けて）誰かきて！ 誰かが罵り合って叫んでいるわ。

付近住民 そこに人が倒れている。二人組が走って逃げていくぞ。

グレートヒェン 倒れているのは誰でしょう。

マルテ あなたのお兄さんよ。

グレートヒェン（兄に駆け寄って）私、どうしたらいいんでしょう。

ヴァレンティン（血を吐きながら、妹に）俺は死ぬんだ。だから近くに来て、俺の話を聞いてくれ。なあグレートヒェン、お前はまだネンネで、一向に分別がついていない。それで今回みたいなヘマを仕出かすんだ。

グレートヒェン ああ、死なないで兄さん。

ヴァレンティン ゴホッ、そうしてお前は売女になったんだ。一人の男とこっそりやったお前は、やがてその男の数を一人ずつ増やしていく。それが一ダースにもなると、もうお前は、町の慰みものだ。

グレートヒェン なんて酷いことを言うの。ああ、神さま。

ヴァレンティン 冗談でも神さまなんて言うのはよせ。よしんば神さまが許してくれても、この世では、お前は呪われているんだ。

マルテ（ヴァレンティンに） あんた、まず自分の魂を救っていただきたいさかいよ。この期に及んで、悪口の罪を背負い込むつもりなの。

ヴァレンティン ゴボッ、黙れ、この恥知らずの取り持ち女め。

グレートヒェン（泣きながら） ああ、兄さん血が口からあふれてるわ。なんて苦しそうなんでしょう。

ヴァレンティン な……涙なんか流すな。お前が恥を忘れたとき、俺の胸は一番ひどい突きを喰らったんだ。俺は今死んで、立派な軍人として神さまのところへ行く（死ぬ）。

第四幕

グレートヒエン悲劇

教会の片隅

会衆の後ろのほうで、目立たないように祈るグレートヒェン。彼女の背後には呵責の霊が漂っている。

呵責の霊（グレートヒェンを覆うように） まだあどけない少女だった頃と比べると、なんとまあ、お前は変わり果ててしまったことだろう。お前の胸のなかには、なんたる悪業が宿っているのか。

グレートヒェン（人の群れの先にある聖母子像を見つめながら） どうかお許しください、聖母さま。

呵責の霊 お前は、眠りながら死の世界に落ち込んだ母のために祈るのか。それともお前の家の前で流された兄の血のために祈るのか。

グレートヒェン ああ、苦しい。心の中を行き来して、私を責め立てる、この残酷な霊から逃れたい。

会衆の歌声 ディエス・イレ（怒りの日）、

その日には、世界は溶けて灰となる。

呵責の霊 神の怒りがお前を襲い、審判のラッパが鳴り響く。

グレートヒェン もうここから出ていこう。折からのつわりも加わって、これ以上は耐えられない。心臓が止まってしまいそうだわ（退場）。

ワルプルギスの夜（1）

ドイツの山中（ブロッケン山）、霊の世界とつながった妖しい場所。そこに辿り着いたファウストとメフィスト

ファウスト（憤然としながら） どうして私をこんなところに連れてきた。

メフィスト 一つには気晴らしです。あなたは、このところ、あまりにも辛気臭い空気を吸ってきましたからね。少しぐらい憂さを晴らさないと、その心が壊れてしまうでしょう。

ファウスト グレートヒェンを置いてきてまでする憂さ晴らしに、どれほどの価値があるというのだ。

メフィスト そこですよそこ。私たちは、今グレートヒェンの傍にいてはならないんです。なにしろ私たちは、兵隊ごろしの下手人なんですから。しかも、あの娘が住む界限では、有名なお尋ね者になっているんです。となれば、ほとぼりが冷めるまでは、あの辺に戻ってはなりません。

ファウスト だからって、何日もここにいろというのか。どうしたって気分が落ち着かないぞ。

メフィスト いや、この山ではね、時間の流れかたが、娑婆とは少しばかり違うんです。一晩いれば、向こうでは五日ぐらいは過ぎていくはずですよ。

ファウスト では一晩だけここにいろとしよう。

メフィスト（独白）まあ、本当は半日（十二時間）で一年（十二か月）が過ぎてしまうんですがね。それを言ったら、コイツにすぐ帰られてしまうだろうからなあ。

ファウスト 何か言ったかね。

メフィスト いえ、何でもありません。どうか、私の着物の端を、しっかり握っててください。雑踏のなかで迷子になっては大変ですから。

ファウスト（周囲を見渡しながら）ああ、魑魅魍魎がひしめいているからな。こんなのを見ていたら、自分で自分が分からなくなりそうだ。

メフィスト それでいいんです。憂さを晴らすというのは、理性的な自分をぶっこわすことですからね。そのためには、まず強い酒を飲むことが何より有効です。一杯いきましよう（ファウストに酒をつぐ）。

ファウスト まあ、たった一晩だけの憂さ晴らしだ。遠慮せずに飲むとしよう。

池のほとり

ファウストたちがワルプルギスの祭りに加わってから六時間後。ゆえに現界では半年が経っている。池のほとりには、マルテとグレートヒェンが立っていて、そのグレートヒェンの腕には、小さな赤ん坊が抱かれている。

グレートヒェン マルテさんが助けてくれなかったら、こうして子供を産むなんて出来なかったでしょうね。

マルテ だって、あなたあんまり可哀そうだったから。でも私がしたことなんて、産婆を呼んだことぐらいだわ。

グレートヒェン そんなことはありません。食事の世話もしてくれだし、私が動けないときには、あかちゃん世話もしてくれました。

マルテ いいのよ。罪ほろぼしの気持ちもあったし。あんな大変な人たちと、私が間を取り持ってしまったのだから。

グレートヒェン ええ、たしかに大変な目には遭いました。でも私、あの人のことを今も好きでいるんです。だからこの子にハインリッヒっていう名前もつけたんです。

マルテ あなたのお人好しも、たいがいね。

グレートヒェン（笑いながら赤ん坊に向かって）そうかしら、ハインリッヒ。

〔母親に笑いかけられて赤ん坊も笑ったが、それを見たグレートヒェンの表情が、にわかに曇り、歪んでゆく〕

グレートヒェン あれ……何かおかしい。ハインリッヒの笑顔が変なふうに見える。まるで人を馬鹿にしたような……同情心などなくて、どんな人間も愛してはやらないぞと、そう言っているみたい……

マルテ 何を言ってるの？

グレートヒェン 悪魔の顔、悪魔の顔だわ。ハインリッヒさんとの子供なのに、どうしてあの、お付きの人の顔にそっくりなの？

マルテ そんなことないわよ。何が見えてるのグレートヒェン！ 赤ちゃんの顔は何も変わってないわ。

グレートヒェン 違う、変わってるわ。これはもう悪魔の子になってる。このままじゃいけない、この悪魔の力を封じ込めなくっちゃ！

「グレートヒェン、突如、池に向かって赤ん坊を投げる。すぐに水から浮いてきた赤ん坊を、こんどは自分の手で沈める」

マルテ 何してるの、やめなさい！ 自分の子供になんてことをしてるの！

グレートヒェン 止めないでマルテさん、これは悪魔なの、悪魔なの！

マルテ ああ、柔弱な赤ん坊はもう死んでしまってる！ なんてことなの！ なんて悲劇なの！ 私たちには少しの平穏も与えられないの？

第五幕

悲劇の終わり

ワルプルギスの夜（２）

メフィスト、酔っているファウストに語りかける。

メフィスト 覚えてますか？ 昨日の日暮れ頃にここに来て、夜通し楽しみましたね。今はもう朝になりつつありますよ。

ファウスト そうすると、もう半日ここにいたってことか。

メフィスト まあ色々と見ものがありましたから、時間が過ぎるのは早かったことでしょう。どうですか。楽しかったですか。

ファウスト そうだと素直に答えるのも癪にさわるが、心のわだかまりが晴れたような気がするもの確かだ。あれ？（視界の隅に何かを見つける）

メフィスト どういたしました？

ファウスト お前にも見えるだろうか。むこうに青ざめた、けれども美しい顔の娘が独りぼっちいるだろう。

メフィスト ああ、あなたの意識に合せると……おりますね。

ファウスト ひどくゆっくり歩いているところからすると、足に鎖でもつけられているのだろうか。率直にいうと、あれは私のグレートヒェンに似ているのではないか。

メフィスト ハア（とため息をつきつつ）あれはですね、魔素の澱みといったもので、誰が見ても、自分にとって気がかりな相手に見える、そういうった代物なんです。投影の器とでもいいますかね……だから私が普通に見ると、ただの灰色の霧のようにはしか見えません。

ファウスト だが俺にとっては、たしかにあの胸は、グレートヒェンが俺に捧げてくれた胸に見えるし、彼女が俺に捧げてくれた体に見える。

メフィスト（ファウストの視線の先にある霧を払って）でもこうして澱みを振り払えば、人影なんて消えてしまいます。

ファウスト ああ、グレートヒェンが煙のように消えてしまった。だがもう遅い。いまや俺は、本物のグレートヒェンに会いたいという気持ちを抑えられなくなっている。

メフィスト（独白）もう少しここで足止めしておきたかったのだが。いま帰れば、あれから大体一年。グレートヒェンは、まだ生きているのではないだろうか。そうすると、あの娘の存在が、どうしても俺たち二人の旅の足枷になってしまうのだが。

ファウスト 何か言ったか？

メフィスト 何も言ってません。ええ、あきらめて帰りましょう。それでいいです、面倒ごとが待っているでしょうが仕方ありません。

マルテの家

グレートヒェンが住んでいる街へと帰ってきた、ファウストとメフィスト。二人がまず立ち寄ったのは、マルテの家だった。そのマルテから事情を聞き、奈落の底に突き落とされたファウスト。今は、マルテは部屋から出て行っており、ファウストの傍近くにいたのはメフィストだけである。

ファウスト 悲惨な目にあって、絶望に沈んでいるのだな。長いあいだ、みじめな思いをして、今は囚われの身になっている。あの優しいグレートヒェンが、嬰兒（乳児）殺しの罪人として牢獄につながれているのだ。

メフィスト なにも、あの女が初めてという訳でもありませんさ。

ファウスト 犬め、忌まわしいけどものめ。あれが初めてではないだと！ 初めてじゃなくとも、十二分に悲惨なことだ。むごたらしいことだ。いや、俺にとっては、彼女ただ一人の苦しみだけで、世界が滅亡するほどの痛みが感じられる。それなのにお前は、俺と彼女のことを平気でせせら笑っているのだ！

メフィスト　べつに笑ってはいません。この顔は生まれつきのものです。

ファウスト　なら彼女を救うのだ。さもないと、お前をひどい目に遭わせてやる。幾千年をかけて、お前に恐ろしい呪いをかけるぞ。さあ、今すぐ俺を牢獄に連れて行って、グレートヒェンと面会させるのだ。

メフィスト　それは覚悟の上の話ですか？　この街にあつては、私たち二人の「ヴァレンティン殺し」の罪状は、そのまま立派に生きてるんですよ。牢獄などに行けば、私たちが捕縛されて死刑にされるかもしれないですよ。

ファウスト　それは覚悟の上だ。俺を連れて行け、そうしてグレートヒェンを救うのだ。

メフィスト　ではこうしましょう。私が牢番の頭をぼんやりとさせますから、その間に、あなたは牢の鍵を手にいれなさい。そのあと私が見張っているから、あなたがグレートヒェンを外へ連れ出すんだ。私は魔法の馬を用意して、門であなた方が出てくるのを待っています。

ファウスト　わかった、それでいい。すぐに出かけよう。

牢獄

ファウスト、すでに鍵の束とランプを持って、小さな鉄の扉の前に立っている。

ファウスト　この固い扉の向こうにグレートヒェンが住んでいるのだ。ここに彼女がいる。ところが俺は、いまや彼女に会うことを躊躇っている。会うのが怖いのだ。だが早くしなければならない。ぐずぐずしていれば、グレートヒェンの死期を早めてしまうだろう。

〔牢の奥から歌が聞こえてくる〕

グレートヒェン（かなり精神的におかしくなっている）

よこしまな母さんが、私を殺してしまったの。

やくざな父さんが、私を食べてしまったの。

けれど私は鳥になって、

遠いお空に飛んでゆく。

ファウスト グレートヒェンは、私がここで、自分の歌を聴いているとは、夢にも思っていまい（中へ入っていく）。

グレートヒェン（布団で身を包みながら）どうしよう、人が来るわ。きっとむごく殺されるわ。

ファウスト 静かに、静かにしておくれ。お前を救いに来たんだ。

グレートヒェン（ファウストの前にひれ伏して）誰かは知りませんが、どうか私に哀れみをかけてください。どうか殺さないで。私まだこんなに若いのに、もう死ななくちゃならないなんてあんまりです。

ファウスト そんなに大きな声を立てると、牢番が目覚ましてしまう。（錠を外そうと、グレートヒェンの足の鎖をつかむ）

グレートヒェン そんな乱暴に私を掴まないで。手荒なことはしないでください。私あなたに何もしてないでしょう。これまで会ったことのない方ですもの。

ファウスト 私だ、ハインリッヒだよ。

グレートヒェン（ファウストを認識できないまま）私あなたに逆らったりはしません。（布を巻いたものを抱きながら）ただ赤ちゃんにお乳をやらせていただきたいの。私、一晩中この子を抱いていましたのよ。

ファウスト それは子供じゃない。

グレートヒェン あなたもそんなことを言うのですか。ここに子供がいるのに、みんな私が子供を殺しただなんて言うんです。意地が悪いってらないわ。

ファウスト（倒れ伏して）そんなに狂ってしまったているのか。だが、心からお前を愛している人間が、今お前の足元にいるんだ。みじめな囚われの部屋から、お前を救おうとしているんだ。

グレートヒェン 私を救ってくれるのですか？ では一緒に祈ってください。この部屋の床の下には、地獄の世界があるんです。そこで悪魔たちは、恐ろしい形相で騒ぎ立っている。あなたは私が、そこに落ち込まないように祈ってください。

ファウスト（やや大きな声で）グレートヒェン！ グレートヒェン！ しっかりしてくれ！

グレートヒエン あ、今のはあの方の声だったわ（と言って立ち上がる。同時に足の鎖が外れる）。どこにいらっしゃるのかしら。悪魔たちが罵る声に混じって、あの懐かしい、優しい声がはっきり聞こえたわ。

ファウスト 私だよ。ここにいるんだ。

グレートヒエン あなたなのね（ファウストに縋りつく）。ええ、あなただわ。私の苦しみはどこへ行ってしまったのだろう。私は助かった。あそこには、あなたと初めてお話をした、あの通り道が見えますわ。マルテおばさんの家も見えますわ。

ファウスト 一緒においで。ここから逃げるんだ。

グレートヒエン お待ちになって。私はもっとあなたと一緒にいたいんです。どうか、この唇にキスをしてください。

ファウスト 急がなくちゃならないんだ。

グレートヒエン どうなさったの？ キスもしてくださいさらないの？ でしたら、私からしてさしあげますわ（キスをする）。ああ、あなたの唇はなんて冷たいの？ あなたの愛情はどこへ行ってしまったの？

ファウスト いい子だから、しっかりしておくれ。あとから今の千倍の情熱で愛してあげるから、今はともかくついておいで。

グレートヒエン ああ、あなたが私を愛さなくなっても仕方ありません。だって私ひどいことをしてしまったんですもの。私お母さんを殺してしまっし、赤ちゃんは池に沈めてしまいましたの。でもあれは、私とあなたに授かった子じゃなかった。あれは悪魔の子だったの。

ファウスト 過ぎたことは忘れてくれ。お前からそんなことを言われると、私は死にたい気持ちになってしまう。だが私のことが分かるなら、それだけは幸いだ。さあ一緒においで。

グレートヒエン ここから離れるんですか。でも私行かれません。良心に責められながら、見知らぬ他国を歩くなんで惨めですもの。それに結局つかまるのですし。

ファウスト 私がついているのだから大丈夫だ。

グレートヒェン　なら早く、あの可哀そうな赤ちゃんを助けて。池から浮き上がろうとして、手足をバタつかせています。はやく助けてあげて。

ファウスト　気を確かに。本当に、ただの一足で自由の身になれるのだから。いや、こんなに頼んでも駄目なら、お前を抱きかかえて逃げるしかない。もう夜が明けてきた。

グレートヒェン　夜が明ける。そう、私の最後の日が来たんだわ。私の婚礼の日になるはずだったのに。ねえあなた、誰にもグレートヒェンのところに通ったなんて言っちゃだめよ。私は売女と呼ばれて、その評判は地に落ちてしまっているのだから。

ファウスト　ああ、俺は生まれてこなければよかった！

〔メフィストが現れる〕

メフィスト　急いでくださいよ。でないと、あなたがたは破滅ですぞ。何をぐずぐず無駄話なんかしてるんです。

グレートヒェン（メフィストを見て）あの人です、あの人です。ハインリッヒさん、早くあの人を追いつ出してください。悪魔が、この神聖な場所になんの用があるのでしょうか。きっと私を地獄へと攫っていくのだわ。

ファウスト　我慢して一緒に来るんだ。お前は生きていなければならない。

グレートヒェン　あの人とでしたら、私はどこにも行きません。神さま、どうか私をお裁きください。私はこの身を、あなたにお任せいたします。

メフィスト（ファウストに）あなただけでもおいでなさい。女は無理です。

グレートヒェン　天なる父よ、あなたのものである私をお救いください。天使たちよ、この身の周りに立って、私をお護りください。（ファウストに）私、あなたのことが怖いわ。とても一緒には行けません。

メフィスト　女は裁かれた。

天上の声　救われた。

メフィスト（ファウストに）こちらです。こちらにおいでなさい。

〔ファウストとメフィスト、グレートヒェンが囚われている牢屋から離れていく〕

グレートヒェン（牢の奥から、次第に遠くに消えるように）ハインリッヒさん！ ハインリッヒさん！

第一部終わり

あとがきと付録

おわりに（第二部の展望）

まずはゲーテの言葉の引用から始めましょう。

第一部の終わりのところで、どんなに恐ろしい嫌悪感がグレートヒエンを襲ったか、そのしつぺ返りで、ファウストの魂が根底から揺さぶられずにはすまなかったことを、よくよく考えてみれば、私は、自分がやったように、この主人公を完全に無力化し、もはや破滅したものとみなして、そのような見せかけの仮死状態からまた一つの新しい生を燃え立たせるより、救いがなかったのだよ。

一切が同情であり、もっとも深い慈悲なのだ。

そこでは、彼がそうした救いに値したか否かについて、いかなる裁きも行われなし、また疑問の余地もない。人間の裁判官にかかれば、とてもそんな訳にはいくまいがね。（エッカーマン『ゲーテとの会話』山下肇訳より）

これは晩年のゲーテが、自身の秘書に語った言葉です。もう少し分かりやすく表現すれば、次のような文章になるでしょう。

第一部の終わりのところ——つまり牢獄の場面——で、どんなに恐ろしい嫌悪感がグレートヒエンを襲ったか。そのしつぺ返りで、ファウストの魂が根底から揺さぶられずにはすまなかったか。

そのことを、よくよく考えてみれば、私は第二部の終わりで、ファウストを完全に無力化し、もはや破滅したものとみなすしかなかった。そうして、そのような見せかけの仮死状態から、また一つの新しい生を燃え立たせる以外には、もはやファウストを救う手段がなかったのだ。

その場面においては、一切が同情であり、もっとも深い慈悲であると言える。

そこでは、彼がそうした救いに値したか否かについて、いかなる裁きも行われなし、また疑問の余地もない。人間の裁判官にかかれば、とてもそんな訳にはいくまいがね——

ここには「ファウスト第二部」の本質的な展望がすべて書かれています。まさしく第二部は、主人公が、この救いの場面に到達するための「道程」として描かれることになるのです。

そして、右で示唆された場面は、錬金術における「アルペド」の状態に他なりません。無力化（胎児化）した主人公。疑問の余地のない（＝絶対的な）許し。つまりいかなる裁きも行われない寛容性。そして新生——

その場面に到達するため、ファウストは、まず権力を求めます。つまり王に取り入ったり、戦争をしたりするのは、それが「第二部」の世界です。次の配信で描かれることになるのは、そうした大きなストーリーであるのです。

その要約と戯曲化は、第一部よりもずっと難しいものになるでしょうが、とにかく書き始めてみようと思います。

付録 高市総理誕生

終わりと始まり

かれこれ一年ほど前の話になると思うが、私は『ディオニュソスの深層・世界の墓篇』の付録として次のような文章を掲げた。

〔本書の準備中に、兵庫県における斎藤知事の再選が成った。〕そこから遡ること一か月ほどだろうか。自民党の総裁選で高市早苗氏が敗れたとき、私のなかに「これで日本の政治は終わった」という暗い感情が生まれ、それが日々大きくなっていった。――

この敗北によって石破内閣が誕生した訳であるが、それはまさに日本政治の死そのものだった。なにしろ石破は「自民党は公約を守ったことがない」と言い切り、自分たちが行う政治が欺瞞そのものであることを明らかにしたのだから。そして実際にも、石破政権の政治は、上面の美辞麗句を、実際の行動ですべて裏切るというパターンの連続だった。

これによって国民の支持を失った自民党は、台頭する保守野党によって、その勢力をどんどん削がれていった。すなわち参院選における参政党旋風のことだ。このときの情景は、まだ私たちの記憶に新しい。かくして辞任を余儀なくされた石破は、それでも醜態を晒しながら、首相の座に縋ろうとした。しかし民意（＝選挙結果）はこれを許さず、結局はその座を手放さざるを得なかった。

そうして一年ぶりに開催された自民党総裁選。図式としては、高市早苗と小泉進次郎の一騎打ちに近いものがあり、マスコミはこぞって進次郎を応援した。あのコロンビア大学院を卒業したと言いながら、一片の英語も話せなかった男をである。どう考えても学歴詐称としか思えない男である。

もしもこの小泉進次郎が当選していたら、日本は、石破内閣の時代に逆戻りだっただろう。しかし、麻生元首相のキングメーカーとしての力が働き、政局が大きく動いた。高市早苗総裁が誕生したのである。

公明党の政権離脱

しかも、誕生早々に、公明党が連立政権から離脱してくれた。これをテレビで知ったとき、私は思わ

ずガッツポーズをしてしまった。なぜそのようなことをしたのかを知ってもらうため、ここで再び、一年前の文章を掲げることしよう。

——そもそも「日本国民にとっての正義」には、戦うべき三つの「悪」が存在していた。

一つ目は、自民党の左派と公明党と左翼政党。これらはシナ（中国）の走狗となって、日本国民の富を吸い上げては、かの国に注ぎ込んでいる人々である。はっきり言えば中国のスパイにあたる勢力であり、いまや率直に彼らを「売国奴」と呼んでも間違いではない——『ディオニュソスの深層・世界の墓篇』付録より

右の文章を読めば、私が公明党の政権離脱に歓喜したのが、しごく当然であるのが分かるだろう。もっとも、公明党の離脱によって、与党は議席を大きく減らしてしまった。そして、それにより、自民党総裁・内閣総理大臣、という図式を満たすことが大変難しくなってしまったのである。

そのような局面にあって、自民党と連立を組むことによって、これを救ったのが「日本維新の会」であった。多くの人々にとって、ここで維新が出てくるのは大変意外なことだった。私にしても、つまり、国民民主党がその役割を果たすものと思っていたのだ。

しかし国民民主党は、この場面で、恐ろしいほどの迷走を始めてしまった。最終的には公明党と連携すると言いついたのだから、もはや呆れ果てるしかない。もっとも国民民主党は、茨城県知事選では、大井川候補を応援していた人たちだから、何かを期待するほうが悪かったのかもしれないが。

財務省とマスメディア

さて、一年前の文章で「日本の三大悪の一つめ」に触れていたので、ついでに二つ目と三つ目の悪についても語っておこう。

——二つめは財務省。この省庁に勤めているエリート官僚たちは、自分たちの利権のため、日本国民に対して、経済的な犠牲を強いている。

自分たちの利権を守るためならば、日本国民のなかにいくら「経済的苦境による自殺者」が出ようと、全く良心が痛まないのが彼らだ。

しかも彼らは日本の国力を下げることで、日本国民を「より外国から責められやすい立場」に陥れている。つまり彼らは、安全保障上においても、大きな害悪を垂れ流しているということだ。

三つめは、上記二つの悪の傀儡となってしまった、大手のマスメディアである。ここに日教組なども含めてよいと思うが、彼らの情報操作によって、国民は自己の不利益を従順に受け入れるような「愚かで従順な羊」になってしまった。

左翼議員、財務省、マスメディア——私たち日本人が、安全で豊かな、かつ自国に誇りを持てるような生活を送るためには、どうしても、この三つの悪を叩き潰さなければならない——『ディオニュソスの深層・世界の墓篇』付録より

高市総理は、財務省に「片山さつき」というS級の刺客を送り込んだ。これによって、財務省の恣意と悪意にみちた経済政策は、完膚なきまで骨抜きにされることだろう。

じつは高市総理は、イギリスのサッチャー首相を敬愛しており、そのサッチャーの経済上の師はハイエクだった。この経済学者ハイエクは、市場の自律性を訴えた論客である。こうした理念の流れの中にある高市総理が、ほとんど社会主義的な財務省のあり方を看過する訳がないのである。

それこそサッチャーが英国病（社会主義による経済低迷）を打破したように、高市総理が、社会主義化した日本の経済を立て直してくれることだろう。

さらにマスメディアに関して言えば、高市総理が、既存のメディアを重要視していないことは明らかである。それどころか敵視しているかもしれない。なにせ彼女は、地上波を頭越しにして、ネットで自己の政策発表を行ってしまったぐらいなのだから。

マスコミの側にしても、政権発足時から、順調に高市氏への誹謗を行っている。したがって両者が対決姿勢になるのは、むしろ当然のことである。

しかしながら、マスコミと敵対する高市氏が「スパイ防止法」を成立させたとき、この国の「中国の匂いがする膿」は、一気に洗い流されることになるだろう。効率的にそれを為すためには、メディア・スパイト、議員スパイを、同時に検挙する必要があるだろうが。

戯曲「ファウスト第一部」

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
